

やぶれ傘

一一五号

二〇二〇年八月



大川の海月を橋の半ばより	根橋宏次
麦茶注ぐ修正液の生乾き	きくちきみえ
ほのぐらき夏越の雨となりにけり	大島英昭
清水汲むまづ右足の位置決めて	青谷小枝
ロルカからカミュへ蠅虎が跳ぶ	藤井美晴
てんとう虫のほり切つたる草の先	廣瀬雅男
雲海の下の街より登りきて	井久保 勲
斎場へゆるやかな坂山法師	瀬島酒望
饒阿寺の庭にもぐもぐ毛虫でて	白石正躬
凸凹の路の凹 ^{ぼた} を行く蚯蚓	渡邊孝彦
カレートの香アガパンサスの昼下り	安藤久美子
曲り家の三和土に風や柿若葉	天野美登里
もの陰に翅とちてゐる夏の蝶	秋山信行
良き話に日傘くるくる回しけり	有賀昌子
梅雨来る心につもる雨の音	松村光典

抄 集 句 傘 紀 大 崎

もの洗ふ蛇口いつばい開けて夏	武藤節子
用水に鯉水際に半夏生	森 美佐子
明易しトラックが出る駐車場	山本久枝
道問うてなほ真つ直ぐに行く薄暑	吉田幸恵
カラフルな一両電車梅雨晴間	浅嶋 肇
おぼろげな母の面影粽食ふ	石塚清文
はんなりとした言葉聞く納涼床	稲田延子
良い方の声でママ呼ぶかたつむり	岩藤礼子
夏草の川面を覆ふほとにまで	神山市実
小雨降つて落ち着く田圃半夏生	眞田忠雄
花舗の灯の遅くまで点き夏に入る	高橋 均
メビウスの輪となりて死す蚯蚓かな	手島百合子
花びらのけだるき午後の菖蒲園	貫井照子
梵鐘の響く卵の花摘しかな	萩原溪人
軽嶋の子の巣立ちて僧は池掃除	橋本美代

夕立

大崎紀夫

ここいらの砂地あかるし蟻地獄
土手下に火葬場からす麦は熟れ
波に帆がかくれてしまふかにヨット
ちらちらと目高は泳ぎ目が見える
跨ぎ越すガードレールと小町草

日が暮るる蠅虎と部屋にゐて
国道の向うへ夕立去りにけり
虎尾草に夜風そろそろ吹くころと
かはほりの反転したる先に月
夕焼けのいろ薄れつつ濁りつつ
桑の実のくろきを摘まみ昼近し
横向きに笹舟がゆく日の盛り

海月

根橋宏次

大川の海月を橋の半ばより
 虎尾草の尾を振りながら釣り人來
 夕方のニュースはじまる冷奴
 片足を土よりはがし墓
 ときをりはとほる畑みち滑覧
 釣人の居なくなりたる草いきれ
 甘酒が熱くて雨がぱらついて
 蠅叩持つてあたりをうろろと
 白鱈のてんぷら海がすこし見え
 きれぎれに港の汽笛アカンサス

麦茶

きくちきみえ

実梅生る落ちれば傷のつく高さ
 月下美人の向き変へてより眠る
 けふもまた菱の目高に丸い空
 猫眠る午後一片陰ある祠
 梅雨雲の下で飛行機旋回中
 夕焼けは石油タンクの向かう側
 スーパーに入ればすぐにさくらんぼ
 雨水のめだかの甕をあふれけり
 梅雨の夜へ転がつてゆく団子虫
 麦茶注ぐ修正液の生乾き

炎 暑

大島英昭

信号は赤が点滅夏ひばり
くず鉄を重機が潰す梅雨晴れ間
曇りとも晴ともつかず夏つばき
ほのぐらき夏越の雨となりにけり
電線に土鳩が止まる梅雨さなか
うつすらと山が見え出す梅雨ぐもり
梅雨晴を自転車のらりくらし行く
炎昼のペンキ剥げたるナマコ板
自動車か門をはみ出てゐる炎暑
歩道橋下は国道油照り

清 水

青谷小枝

清水汲むまづ右足の位置決めて
山法師咲いて豆腐のうまい宿
バス停はポール一本夏わらび
木苺の花が白くて牛鳴いて
新じゃがを掘り泥の子を抱き上ぐる
雀たつへらおおばこの花咲いて
葉桜の影濃き道を戻りけり
雨あがる月桃の葉に夏の蝶
冷やし酒さてカワハギの肝醤油
烏瓜咲いてジーンズ生乾き

夏草

藤井美晴

川端の枇杷が色づき始めけり
梅雨寒の物干し竿にゐる鳥
烏瓜の花が流るるにはたづみ
向日葵に昼の日中の日が差して
仏桑華日が照りながら雨が降る
ロルカからカミュへ蠅虎が跳ぶ
雀り捨てたるどくだみの葉が匂ふ
鱧の鍋窓といふ窓開け放ち
灼けてゐるレールと釘と枕木と
夏草を踏み一寸だけ駆けてみる

てんとう虫

廣瀬雅男

県境の山を遠くに析の花
曇りたるままに明け行く栗の花
蚊帳吊草蚊帳の形にして見せる
桑の実に触ればほろと落ちにけり
走り根を踏み行く道やほととぎす
本堂の屋根に日当たる夏木立
てんとう虫のぼり切つたる草の先
清水汲む腰痛の腰少し曲げ
妻と居てメロンひとつを持って余す
二つ三つ海月浮きたる昼の波止

雲海

丑久保勲

郭公のこゑを間近に瑞泉寺
 めだか屋の槽に緋目高五六匹
 とぎ汁を薔薇の根元に夏の夕
 薔薇を切る今が盛りと思ひつつ
 雲海の下街より登りきて
 ベランダに鳥の鳴きごゑ明け易し
 汗ぬぐふ駅の時計をいち瞥し
 立葵フランスパンはまだ温し
 七月のかつと照る日となりにけり
 コーヒーすすする二階の窓を鉾が過ぎ

山法師

瀬島酒望

日時計につと触れにけり揚羽蝶
 斎場へゆるやかな坂山法師
 船溜まり見ゆる坂道花蜜柑
 小流れにひら打つ魚が青胡桃
 船腹を上に捨て船雲の峰
 ファミレスの二階が塾に走り梅雨
 錆落とす船がドックに雲の峰
 経蔵は校倉造り合歡の花
 病葉が見えない糸でぶらさがる
 ビーチへと虎尾草の咲く道を降り

毛虫

白石正躬

鏝阿寺の庭にもぐもぐ毛虫でて
物置の釘にほこりの麦藁帽
梅雨の月つきからつぎと雲かかり
小舟から素足をたらす子らがゐて
船の波芦の中へと届きけり
出会ひてもさりげなく去る青大将
大口をあけ初もぎのトマト食ふ
くちなはの過ぎるを待ちて渡し場へ
ダンプ来る川辺の空に雪加ゐて
葉を叩く雨が玉蜀黍畑

蚯 蚓

渡邊孝彦

木から木へ移る尾長や梅雨に入る
凸凹の路の凹くぼみを行く蚯蚓
細道へ曲がる自転車風薫る
文机の中のごちやごちや梅雨に入る
テニス場裏の二畝夏大根
金網の向かうに校舎草茂る
交番の前で日傘をたたむ人
傾ぐ納屋畑にたうもろこしの花
蒲の穂が隅に矩形の遊水池
青柿がソーラーハウス裏庭に

蟻

安藤久美子

鉄 錆 の 多 き 階 段 遠 花 火
わ くら ば の 小 道 を ゆ け ば 自 販 機 へ
待 て ど 来 ず 玉 蜀 黍 の 花 に 風
外 は 雨 冷 房 の 効 く 助 手 席 に
カ レー の 香 ア ガ パ ン サ ス の 昼 下 り
ソ ー ダ 水 硝 子 に 映 る 店 の 内
卓 上 に ハ ザ ー ド マ ッ プ 梅 雨 寒 し
水 洗 ひ し て つ や つ や の ト マ ト 喰 ふ
新 聞 を 手 に 初 蟬 の 声 を 聴 く
足 登 る 蟻 を 払 ひ て 家 に 入 る

柿若葉

天野美登里

石 楠 花 は 百 の 石 段 降 り て よ り
小 流 れ に 四 阿 の 影 花 菖 蒲
胡 瓜 挽 ぐ 雀 の 声 を 聞 き な が ら
川 か ら の 風 の 匂 ひ や 菱 の 花
曲 り 家 の 三 和 土 に 風 や 柿 若 葉
反 故 の 紙 馬 穴 に ポ イ と 夏 の 夜
睡 蓮 の 池 あ る 村 の 診 療 所
螢 狩 川 の 流 れ の 匂 ひ く る
石 垣 は く づ れ 泰 山 木 の 花
墓 碑 銘 に 「 マ リ ア 」 と あ り て 罌 粟 の 花

夏の蝶

秋山信行

釣り宿の地べたに盛られ茗荷の子
えん豆の莢あをあと今朝の汁
タクシーが四つ角まがる立葵
釣船の差し潮わけてゆく夕焼
やいとばな昼の畑はかわききり
とび石に雨はねてゐる沙羅の花
もの陰に翅とぢてゐる夏の蝶
涼風を窓より入れて赤ワイン
背を伸ばしつつ新じゃがを掘る真昼
小社の屋根は板葺き竹落葉

日傘

有賀昌子

鉢植糸のカーネーションは紅ほのか
むくむくと毛虫歩道を行きにけり
パリ土産の香水封のままにして
神木の幣がひらひら夏の蝶
みそ汁の具に篠の子の皮剥いて
いつも通るいつもの家の柿の花
良き話に日傘くるくる回しけり
雨上がり日差し揺れゐる花ざくろ
夏あらしでこでこ道をペダルこぐ
アガパンサスの絵日傘うかトバスの中

◇9月・10月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
9月	1日(火)	AM9:00	こなから会	あいソバル	WEP編集室
	1日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン1	大島英昭
	2日(水)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	井久保 勲
	4日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	4日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山信行
	19日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	26日(土)	AM10:00	楽天会	あいソバル	廣瀬雅男
	26日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
10月	2日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	2日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山信行
	5日(月)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン4	井久保 勲
	6日(火)	AM9:00	こなから会	あいソバル	WEP編集室
	6日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン4	大島英昭
	17日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	18日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	皇居・二の丸公園	井久保 勲
	24日(土)	AM10:00	楽天会	あいソバル	廣瀬雅男
24日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室	

〔注〕ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

10月18日(日)の吟行。集合は10時。

集合場所は皇居・大手門前。

吟行地は皇居・二の丸公園。

句会場は森下文化センター。

風薫る軽井沢なり手打ち蕎麦
 小手毬の上に掌おいてみる
 中仙道歩けば蟬の声近し
 檜林の道に積もりて夏落葉
 大南風楓の枝に波うつて
 穀象のあちらに二匹また二匹
 梅雨来る心につもる雨の音
 梅雨の晴れベンチの前にハト群れる
 梅雨ふかく桜の古木伐られぬ
 もうひとり走る奴をり炎天下

穀象

松村光典

◎連絡先 秋山信行 ☎048-874-0555 藤井美晴 ☎0422-55-2733
 大島英昭 ☎048-592-5041 WEP編集室 ☎03-5368-1870
 廣瀬雅男 ☎048-443-7522 井久保 勲 ☎048-853-3856